

月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-25

旅情を台無しにしたくなかった真紀は、横田の言い分に反論したい気持ちを押さえて、平静を装っていた。

北陸道の有磯海サービスエリアで遅い昼食を済ませてから二時間ほどで、武生インターチェンジを降りたアウディTTクーペは越前市街に入り、やがて越前和紙の里として名高い五箇地区の風情漂う町並みの中をスロウダウンして走行する。

川幅が一問程の川沿いに続く数百メートルの間に、江戸時代後期から営々と営まれる和紙工房が点在していた。

横田の指示に従い、そのうちでも特に趣のある建て構えの製紙所の駐車スペースに車を止めた。

ロングヘアをざっくりした編み込みで小顔ヘアアレンジして、エンジ色のタートルネック・ニット・セーターにブルージーンズと白いスニーカー、黒のテーラードジャケット姿で車から降りた真紀の鼻先を、和紙作りの作業工程から生じる独特な匂いがかすめた。

すぐに工房の入り口から、中年の小柄ではあるが一体がっしりとした体つきの五代目当主が出てきて歓迎の意を表した。

横田は特注サイズの礼を言ってから、真紀のことを大切な友人として紹介した。

和紙のサイズは、紙漉きの道具である漉簀や桁の大きさによって決まる。道具の大きさは、漉き手の工夫や技術で様々なサイズが可能となる。

初めてと言う真紀のために、工房内を案内してもらい、紙漉きの実演を見せてもらった真紀は、当主の体躯の所以が分かった。

応接室に通された横田はワインレッドのダウンジャケットを脱ぐと、持ってきた裸婦画を写したA4サイズの紙焼き写真二枚をテーブルに並べて、「写真で失礼ですが、お陰さまで、こんな感じの作品になりました」と五代目に報告した。

写真を見入っていた五代目は、「ほお、裸婦画でしたか！」と以外そうな顔をして目を細めると、「あくまで写真から受ける印象ですが、二作とも和紙を生かし切っていると思います。しかし裸婦とは予想外でした……。ある意味では、横田先生の処女作と言っても過言ではありませんね。ぜひ、実物にもお目にかかりたい！」としきりに誉める。

五代目の評価に感動してウルウルする真紀は、高揚した顔で横田の様子をうかがった。